乳幼児期のテレビ・ビデオ接触の実態
および社会情緒的発達との関連
― 0歳・1歳・2歳の3時点調査から ―

菅原ますみ

1．はじめに

0歳から2歳までの乳幼児の映像メディア接触（テレビ、ビデオ、テレビゲーム）に関する0歳、1歳、2歳の3時点間での縦断的な調査をおこなった。子どもの発達は最初期より多様な環境的要因の影響を受けるものであることは、これまでの先行研究で十分に明らかにされてきている（NICHD NCCR, 2005)）。“子どもに良い放送”プロジェクトでは、テレビ・ビデオなどの映像メディア接触の発達に及ぼす影響性をより明確に把握するために、以下のような4つの要因群を子どもの成長・発達に沿って測定していくことにした：① メディア接触要因（テレビ、ビデオ・DVD、テレビゲームの3種の映像メディアへの接触量と接触内容、養育者のフィルタリング行動：監督・統制、共視聴、解説など）② 子どもの基本属性的要因（性別、月齢、気質的特徴など）③ 家庭環境要因（社会経済的状態、家族関係、養育機能、養育者の精神的健康など）④ 地域環境要因（子どもが所属する保育・教育機関要因、そこでの子どもの適応状況、友人関係など)。今回の分析では、3時点での接触の実態（接触量および接触内容）と、社会情緒的な発達（言語発達と問題行動傾向）との関連性について縦断的な検討をおこなった。

2．方　法

(1) 対象

“子どもに良い放送”プロジェクト対象者のうち、平成15年1月（Time 1）・16年1月（Time 2)・17年1月（Time 3）の3時点で追跡可能だった1023名が対象となった。子どもの年齢はTime 1時点で生後5ヶ月～11ヶ月（平均7.48ヶ月、SD = 1.77)、Time 2 時点で1歳4ヶ月～1歳11ヶ月（平均約20.02ヶ月、SD = 1.87)、Time 3 時点で2歳4ヶ月～2歳11ヶ月（平均32.05ヶ月、SD = 1.89)、性別人数は男児537名（52.5%)、女児486名（47.5%）である。

(2) 映像メディアへの接触

各年齢とも1月にそれぞれ1週間のテレビ、ビデオ・DVD、テレビゲームの接触時間と内容について、留め置き法による視聴日誌による測定をおこなった。午前0時から24時までの24時間について、15分刻みで接触時間と内容（通常のテレビについてはチャンネル名、BSやCSなどその他のテレビやビデオ・DVD、テレビゲームについてはタイトル名を記載)、および子どもが起床していてかつ存在している居室内での接触形態（1．画面がついているだけ　2．他のことを

しながら見ていた　3．他のことはせず専念してみていた）と接触内容（テレビは番組、ビデオとゲームは使用ソフトの名称）、接触時の共有者の有無（1．子どもだけで見ていた　2．保護者と一緒に見ていた　3．保護者以外の大人と一緒に見ていた）について記入するよう依頼した。

(3) 生活時間

(2) で用いた視聴日誌に、“自宅にいて起床していた時間”と、“起床時間と就寝時間”、“登園・登校時間と帰宅時間”、“屋外遊びと屋内遊び”（Time 2・Time 3)、“絵本読み時間”（Time 3 のみ）を記録する欄を設定し、調査期間中のおおよその生活時間について測定をおこなった。

(4) メディア利用と家庭環境に関する質問紙調査

視聴日誌と同時に保護者1用（母親がいる場合に母親が記入）と保護者2用（両親がいる場合には父親が記入）の質問票への回答を求めた。質問票は前述のような変数群（子どもと家庭に関する属性的変数、養育者の精神的健康度やメディアに対する態度など）によって構成されている。視聴日誌とともに郵送によって配付回収された。

(5) 子どもの発達の測定

① **コミュニケーション行動**　言語的発達の状態を見るために、マッカーサー乳幼児言語発達質問紙（Fenson et al., 1993; 日本語版：小椋、綿巻, 2004）の「語と身振り（8～18ヶ月用)」をTime 2（1歳）で、「語と文法（16～36ヶ月用）」をTime 3（2歳）で実施した。回答された得点を加算し、“表出語彙種類数”を算出した。

② **問題行動の有無**　情緒・行動上の問題の有無を測定するために、子どもの行動調査票2－3歳児用（親記入版、Achenbach & Edelbrock, 1991）の外在化型問題行動（externalizing problems）の攻撃・反抗尺度（aggression)、注意の問題尺度 （attention problems）の2つの下位尺度および内在化型問題行動（internalizing problems）の社会的引きこもり尺度 （social withdraw）の計3つの下位尺度を2歳時に実施した。1歳時点では攻撃・反抗行動に関する外在化型問題行動の萌芽的傾向を測定する尺度を実施した（菅原他、1999)。

3．結果および考察

(1) メディア接触

① **1歳から2歳へのメディア接触量の経年変化**

視聴日誌で1週間にわたって測定された3時点でのテレビ・ビデオ・ゲームの接触量と、これらを総合した映像接触量、保護者など他者と一緒にテレビを見たテレビ共有量、子どもがテレビに集中して視聴したテレビ専念量、外遊び時間（Time2 / Time 3)、絵本読み時間（Time 3 のみ）の1日平均時間を**図1**に示した。

テレビ接触量は平均205.58分と1歳時点が最大で、2歳になると162.82分まで低下している（**表1**参照)。テレビ接触量を内訳別に見ると、減少したのは「テレビ共有（他のことをしながら見ていた、ついているだけ)」であり、「テレビ専念（他のことはせず専念してみていた)」は減

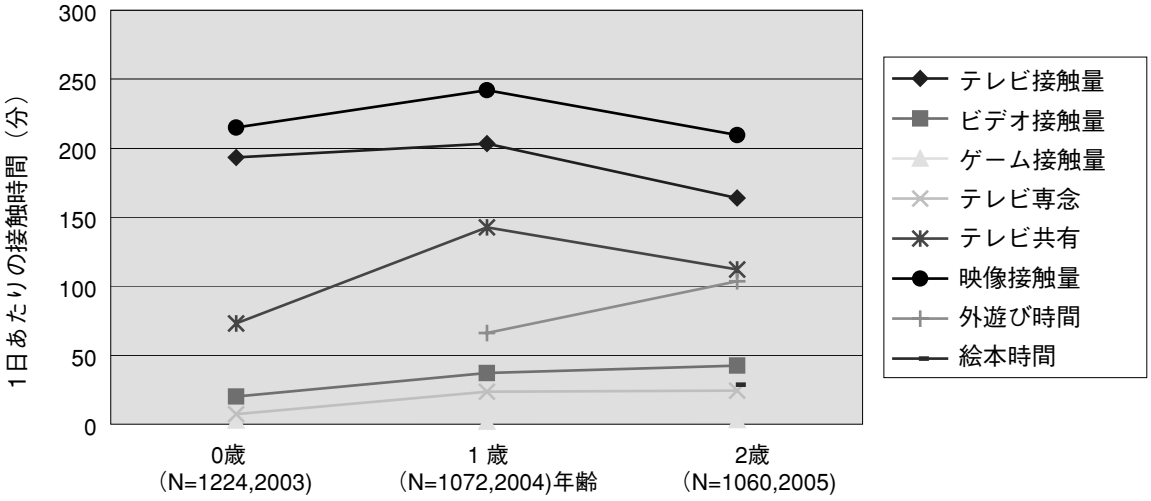


図１　映像メディア接触量の経年変化（０歳～２歳）

少していない。一方、外遊び時間は１歳から２歳にかけて増加しており、運動能力が発達し歩行可能となり保護者と家の外に出たり、家の中で歩きまわれるようになった生活の変化が、「テレビ共有」の減少となって１歳から２歳にかけてのテレビ接触量の減少に反映されたものと思われる。テレビを専念して視聴する時間（テレビ専念量）は０歳から１歳にかけて増加し（０歳時: 6.90分、１歳時: 23.60分、$p < .01$で有意差あり）、２歳でも１歳と同程度の時間となっており、２歳時点では、絵本を読んでいる時間とほぼ同じ時間となっている（テレビ専念量：24.40分、絵本読み時間：28.66分）。ビデオ接触量は加齢とともに有意な増加傾向が認められたが（表１）、テレビゲームは２歳まででは未だほとんど使用されていなかった。

表１に３時点でのテレビ接触量とビデオ接触量の相関を示したが、各時点間で有意な関連が見られ、メディア接触量の個人差には最初期から弱～中程度の安定性が存在すると考えられよう。

表１　乳幼児期のメディア接触量の経年変化（N=903）

	テレビ接触量（分/1 日）	テレビ視聴量[注)]（分/1 日）	ビデオ接触量（分/1 日）
Time 1 (0 歳)	193.34 (120.41) a	65.49 (69.52) a	19.28 (31.07) a
Time 2 (1 歳)	205.58 (116.29) b	104.24 (68.10) b	37.32 (41.92) b
Time 3 (2 歳)	162.82 (105.28) c	91.85 (63.53) c	42.50 (44.62) c

※平均値の差の t-検定：　a, b, c 間で $p<.01$　で有意差あり

※相関係数	テレビ接触量	ビデオ接触量
	Time 1 ×Time 2 = .52**	Time 1 ×Time 2 = .34**
	Time 1 ×Time 3 = .49**	Time 1 ×Time 3 = .15**
	Time 2 ×Time 3 = .67**	Time 2 ×Time 3 = .42**

注）テレビ視聴量はテレビを専念して見た時間と何かをしながらも画面を見ていた時間を合計したもの。　** : $p < .01$

つまり、ある時点でテレビ・ビデオ接触量が急激に増加したり減少する子どもの割合は少ないということである。全体にテレビ接触量の方がビデオ接触量よりも時点間の相関は高めで、より安定度が高い傾向が伺われた。

② 乳幼児の生活時間配分の経年変化

2歳時点では1歳時点と比較して映像接触量が低下して外遊び量が増加しているが（**図2**）、相対的な映像接触量の割合は1歳時点で78.6%、2歳時点で66.8%であった。2歳時点で相対的に外遊び時間が増加して映像接触量が減ったことの理由としては歩行を中心とした運動能力の発達による生活の変化が考えられるが、更に今後の調査の中で検証してゆきたい。

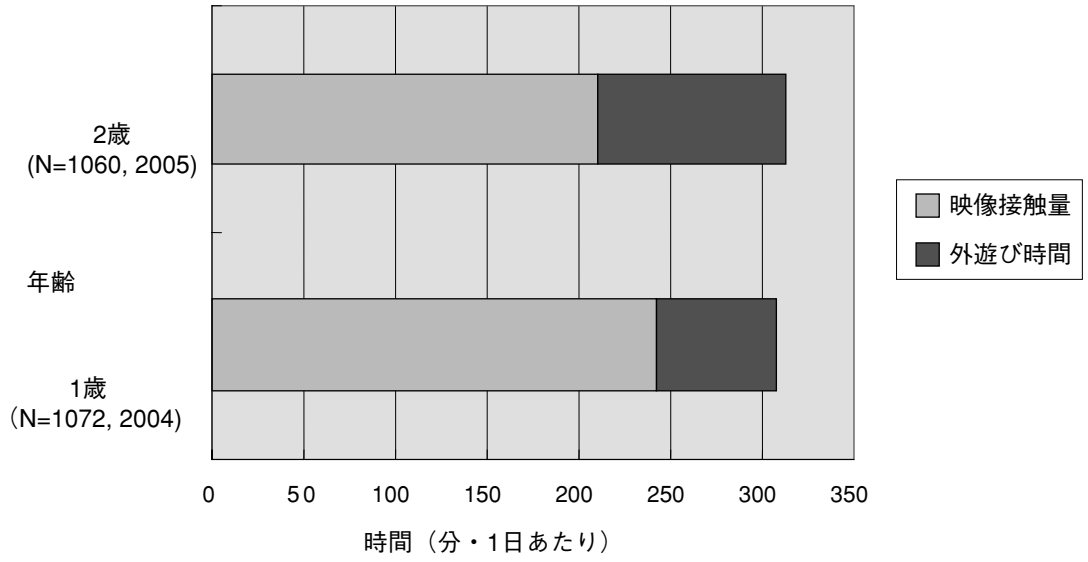


図2　映像接触時間と外遊び時間の経年変化（1歳～2歳）

③ 母親の回答による“子どもがよく見る（接している）番組”の経年変化

0歳から2歳にかけて母親に回答してもらった“子どもがふだんよく見る（接している）番組”（呈示された**表2**の15の番組ジャンルから複数選択してもらったもの）の変化をアンケート調査票の項目から検討した（**表2**）。なお、この年齢の段階で選択されている番組は「保護者が見せている番組」や「保護者が見ている時に一緒に見ている番組」も含まれており、必ずしも子ども本人の意思で見ている番組ばかりではない。

3時点を通じて10%以上の選択率を維持しているのは、幼児向け番組、アニメ・マンガ、ニュ

ース、歌・音楽番組であった。最大の選択率を示している幼児向け番組は、0歳台から既に7割に選択されており、1歳・2歳では9割以上にまで上昇している。次いで高い選択率を示しているアニメ・マンガは0歳から2歳へと急激に上昇し、2歳では7割近くに選択されている。

表2　子どもが“よく見ている”（接している）番組の経年変化（母親回答のアンケート票から、N=1023名）

	選択率（%）		
番組ジャンル	Time 1 (0歳)	Time 2 (1歳)	Time 3 (2歳)
幼児向け番組	70.1	96.4	93.2
アニメ・マンガ	26.6	40.4	68.7
ニュース	20.3	16.1	16.0
歌・音楽番組	11.9	15.4	13.3
ドラマ	8.5	8.4	13.1
ワイドショー	6.0	2.5	2.2
お笑い・コント	6.0	8.6	14.3
教養バラエティー	5.3	6.6	5.9
英会話などの勉強番組	3.5	7.0	5.1
そのほかのバラエティー	3.1	2.6	3.5
スポーツ番組	3.1	2.0	2.2
映画	2.7	2.1	7.5
歴史・科学・自然番組	2.6	3.9	5.5
クイズ・ゲーム	1.9	3.0	4.8
トーク	1.7	1.8	1.7

(2) 2歳児のテレビ接触量の関連要因

① 養育者のフィルタリング行動：調整機能（監督・統制）について

親や教師などの子どもを取り巻くおとながどのように子どものメディア接触をコントロールしているかについて、本プロジェクトでは**図3**のような2つの機能を設定している。1つは子どもの接触量や内容をコントロールする機能で、メディア情報を取り込む時の時間制限や番組やソフトの選択（control）、監督（supervising）に関するものである（**図3a**）調整機能）。もう1つは情報の加工時に影響する共視聴（co-viewing）や番組内容の解説（comment）に関するもので、子どもと一緒に見たかどうかや見た後に話し合うかどうかなどの行動をさしている（**図3b**）共有機能）。またこうした調整・共有行動には、養育者自身のメディア観やメディア接触行動・態度などが影響すると考えられるので、両親を対象としてメディア接触への嗜好や子どもの発達に対するメディアの影響についての意見などについての測定をおこなった。以下では、Time 3

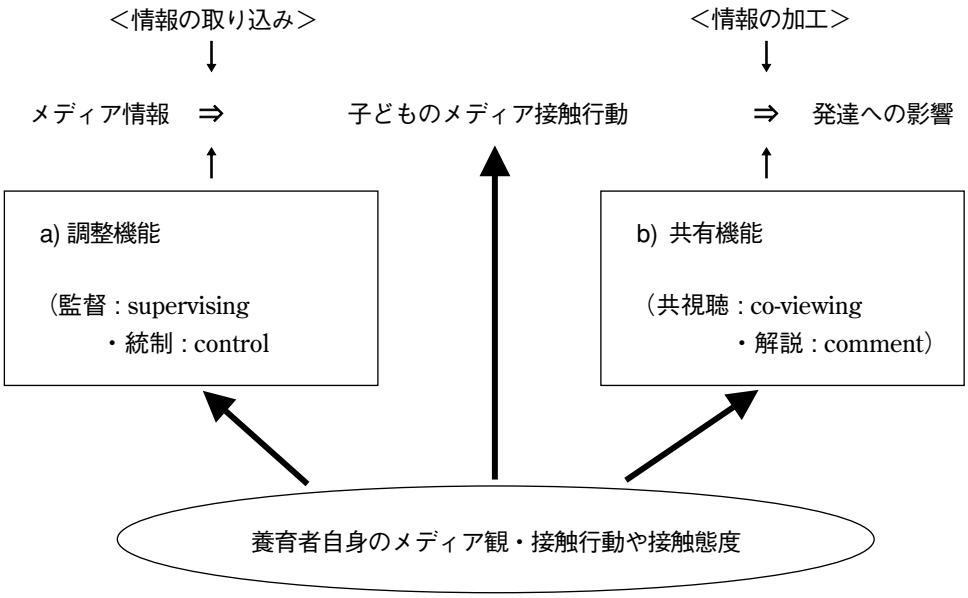


図 3　仮説モデル 1：養育者のフィルタリング行動（調整機能と共有機能）

（2 歳時点）でのテレビ接触量に関する調整機能（監督・統制）の役割について検討をおこなう。

＊　養育者のフィルタリング行動……**表 3** にTime 3（2 歳時点）のアンケート票で、両親それぞれに自己評価してもらった 9 項目のテレビ接触に関するフィルタリング関連項目を示した。(2) の調整機能に関する 7 項目について主成分分析をおこなったところ、“食事中テレビをつけない”で母親の因子負荷量が .40以下の低い値を示したので除外して 6 項目で再分析を実施した（**表 4**）。両親とも第一主成分に .50以上の負荷を示したので、これら 6 項目を加算して“子どものテレビ視聴に対する監督・統制”得点として以降の分析に用いることにした。

表 3　子どものテレビ接触に関する養育者のフィルタリング行動

項目
1）共有機能
＜共視聴:co-viewing＞
＊　○○ちゃんといっしょにテレビをよく見る
＜解説:comment＞
＊　見ているテレビの内容について○○ちゃんと話す
2）調整機能
＜監督：supervising＞
＊　○○ちゃんが見ているテレビの内容が気になる
＊　テレビのことで○○ちゃんに注意する

＜統制：control＞

＊　○○ちゃんに見せたくない内容の番組はチャンネルを変えたりして見せない

＊　○○ちゃんが見てよい番組を決めている

＊　○○ちゃんが見てはいけない番組を決めている

＊　○○ちゃんが（テレビを）見てよい時間を決めている

＊　食事中はテレビをつけない

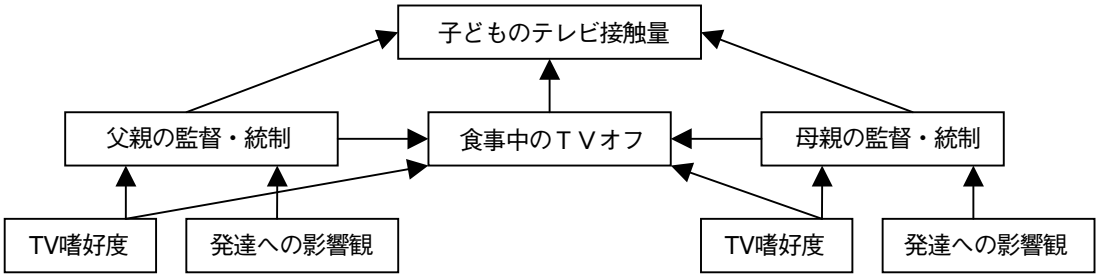
表 4　調整機能：子どものテレビ視聴に対する監督・統制（主成分分析, N=1012）

項目		父親	母親
＊	○○ちゃんが見てよい番組を決めている	.88	.86
＊	○○ちゃんが見てはいけない番組を決めている	.86	.81
＊	○○ちゃんに見せたくない内容の番組はチャンネルを変えたりして見せない	.78	.74
＊	○○ちゃんが（テレビを）見てよい時間を決めている	.73	.70
＊	○○ちゃんが見ているテレビの内容が気になる	.60	.51
＊	テレビのことで○○ちゃんに注意する	.51	.41
説明率		54.15%	47.72%
6 項目のα係数		.82	.77

＊　2 歳児のテレビ接触量と両親の監督・統制要因との関連……**図 4** の仮説モデルに従って、2 歳児のテレビ接触量に影響を及ぼすと予想される要因として、3 つの子ども側要因（年齢、性別、Time 1で測定した気質的特徴）および 6 つの親側要因（Time 3 時点での両親それぞれの就労時間、子どもの発達に及ぼすテレビの影響観、親自身のテレビ嗜好度）を統制要因として解析に投入した。子どもの発達に及ぼすテレビの影響観については、“子どもに対しテレビはよい影響を与えることのほうが多いと思うか、それとも悪い影響を与えることのほうが多いと思うか”という設問に対して 5 段階（5．よい影響のほうが多い～1．悪い影響のほうが多い）で両親とそれぞれに尋ねている。また、親自身のテレビ嗜好度については、**表 5** のような 4 項目についての主成分分析で一次元性が確認されたので、加算した得点を親のテレビ嗜好度として分析に用いた。また、家庭のテレビ接触時間に影響すると考えられる“食事中のテレビ”項目については、両親間の相関係数が　$r=.72$（$p<.01$）と高い値が示されたので、両親の評定値を加算して“家庭の食事中のテレビオフ”得点として解析に投入した。

表５　養育者のテレビ嗜好度（主成分分析, N=1128）

項目	因子負荷量 父親	因子負荷量 母親
＊　テレビを見るのが好きだ	.80	.76
＊　家に帰るとまずテレビをつける	.86	.87
＊　家にいるときはテレビをつけたままにしておく	.83	.84
＊　テレビがない生活はさみしい	.80	.77
説明率	67.94%	65.79%
４項目のα係数	.83	.82



（統制変数：子どもの年齢、性別、気質的特徴、両親の就労時間）

図４　仮説モデル２：子どものテレビ接触量への養育者の調整的（監督・統制）フィルタリング機能の影響モデル

表６に各変数と２歳時点での子どものテレビ接触量（起床中居室内でテレビがオンになっている時間。１週間の視聴日誌から１日あたりの平均接触量を算出したもの）との相関係数を示した。

子どものテレビ接触量に対する養育者の調整機能の役割を検討するために、**図４**のような関連モデルを構成し、子ども側変数（年齢、性別、気質的特徴）と時間的変数である両親の就労時間を統制要因として投入した階層重回帰分析をおこなった（**表７**）。

表７より、子ども側要因で第１ステップで有意だった性別と気質の新奇性追求は最終ステップでは性別のみ有意な値を維持し、女児の方がテレビ接触量が多い傾向が示された。最終ステップ（第３ステップ）で有意な値で残った養育者側要因は、母親のテレビ嗜好度・母親の就労時間、そして家庭の食事中のテレビオフであった。母親がテレビ好きで就労時間が短いほどテレビ接触量は長めになり、食事中にはテレビを消すという習慣を持つ家庭では接触量短めになる傾向が示された。両親の調整的（監督・統制）フィルタリング変数は、父親については10%水準の有意確率でごく若干の関連が伺われる結果となったが、母親については優位な関連性は見られなかった。

これらの変数について**図５**のモデルに沿ったパス解析を探索的に実施したところ、両親の調整的（監督・統制）フィルタリング機能は食事中のテレビオフを経由して間接的に子どものテレビ接触量に影響する傾向が推定された（**図５**）。背景要因として設定された両親のテレビ嗜好度と

表 6　Time 3（2 歳）でのテレビ接触量の関連変数との相関（N=903）関連変数

関連変数	Time 3　テレビ接触量
＜子ども側変数＞	
年齢	-.01
性別	.07*
気質（新奇性追求）	.09*
気質（損害回避）	.04
気質（報酬依存）	-.02
気質（持続）	-.07*
＜養育者側変数＞	
母親の就労時間	-.19**
父親の就労時間	.06
父親のテレビ嗜好度	.17**
母親のテレビ嗜好度	.34**
父親の子どもの発達への TV 影響観	.07*
母親の子どもの発達への TV 影響観	.15**
父親の監督・統制	-.18**
母親の監督・統制	-.10**
＜家庭変数＞	
食事中のテレビオフ	-.40**

* : $p < .05$; **: $p < .01$

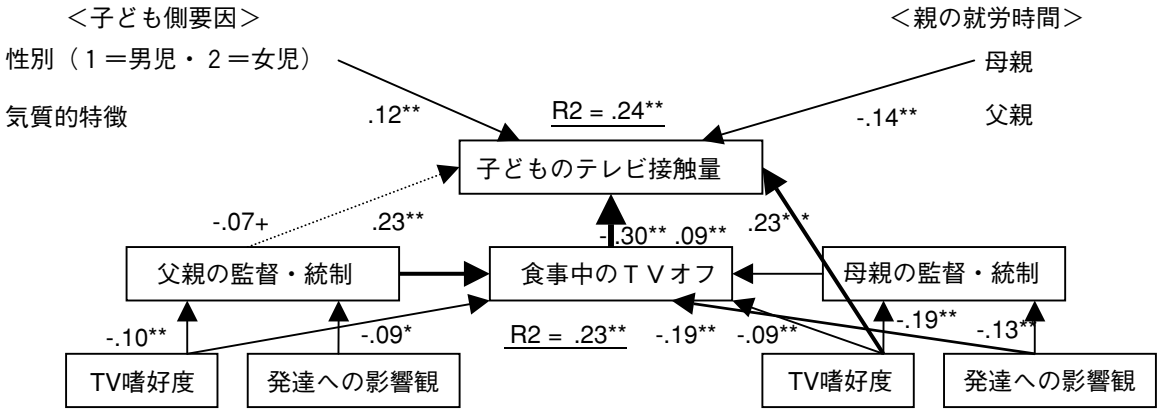


図 5　2 歳児のテレビ接触量と養育者の調整的（監督・統制）フィルタリング機能との関連
（パス解析、N=657）

表７　Time３（２歳）での子どものテレビ接量と養育者の調整（監督･統制）機能（階層重回帰分析、N=657）

		β	調整済みR^2	R^2変化量
第1ステップ	年齢	.01		
	性別	.12 **		
	気質（新奇性追求）	.10 *		
	気質（報酬依存）	.00		
	気質（損害回避）	-.01		
	気質（持続）	-.06	.02 **	.020 **
第2ステップ	年齢	-.01		
	性別	.11 **		
	気質（新奇性追求）	.04		
	気質（報酬依存）	.00		
	気質（損害回避）	.00		
	気質（持続）	-.04		
	母親のTV嗜好度	.29 **		
	父親のTV嗜好度	.10 *		
	母親のTV影響観	.08 *		
	父親のTV影響観	.02		
	母親の就労時間	-.12 **		
	父親の就労時間	.07	.16 **	.142 *
第3ステップ	年齢	.00		
	性別	.12 **		
	気質（新奇性追求）	.03		
	気質（報酬依存）	.01		
	気質（損害回避）	.00		
	気質（持続）	-.03		
	母親のTV嗜好度	.23 **		
	父親のTV嗜好度	.02		
	母親のTV影響観	.03		
	父親のTV影響観	.01		
	母親の就労時間	-.14 **		
	父親の就労時間	.06		
	家庭の食事中TVオフ	-.30 **		
	父親のTV監督･統制	-.07		
	母親のTV監督･統制	.02	.24 **	.09 **

発達への影響観は、仮説通りそれぞれの調整的（監督・統制）フィルタリン行動と関連を持ち、子どもの発達に対するテレビの影響性を否定的なものと考えているほど監督・統制行動が多くなり、またテレビ好きなほど監督・統制行動は少なくなる傾向が示された。食事中のテレビオフには母親の発達への影響観が関連を持っており、母親が否定的な影響があると考えるほど食事中にはテレビを消す程度が増す傾向が示された。今回取り上げた食事中のテレビのオン／オフは、それぞれの家庭におけるテレビ利用度の指標の一つであると考えられるが、頻度分布を見ると大きく両極に分化している（**図６－１,６－２**）。食事中にテレビはつけない（“あてはまる”）と回答した母親276名とつけている（“あてはまらない”）とした310名の家庭の子どものテレビ接触量を比較したところ（平均値の差のt-検定)、つけている家庭で1日平均216.26分（SD=116.48)、つけていない家庭は105.49分（SD=76.33）と110.77分という大きな差が見られた（t=12.49, p < .001)。今回は子どもがいる空間でのテレビのオン･オフを問題として測定をおこなったが、大人だけでのテレビ接触をも含めて、家庭の習慣やポリシーとしてのテレビ利用スタイルを検討していくことも今後興味深い視点となるのではないだろうか。

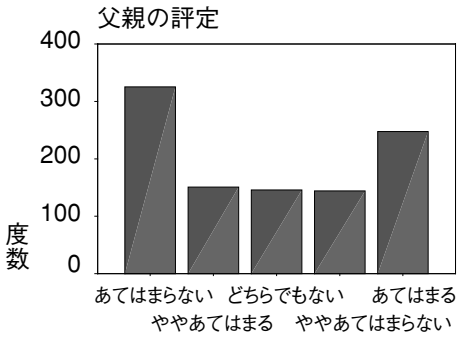


図６－１ “食事中はTVをつけない”
：父親評定値の分布

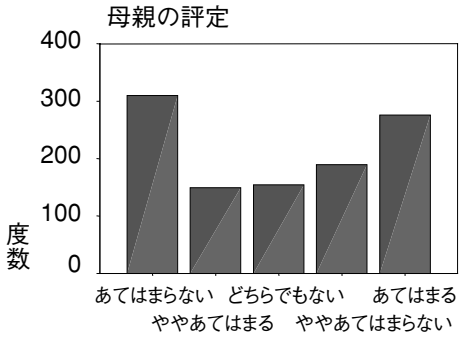


図６－２ “食事中はTVをつけない”
：母親評定値の分布

② ２歳児のテレビ接触量の性差

テレビ接触量に関する男女差について検討するために、時間的代替となる外遊び時間とビデオ接触量の性差と、映像接触量の性差を検討した（表８）。テレビ接触量では平均で14.85分女児の方が長めであるが、ビデオ接触量では7.03分男児の方が長めに接触していた。外遊び時間とテレビ・ビデオ・テレビゲームを合計した映像接触時間には有意な差は見られなかった。これらの結果から、女児はテレビを、男児はビデオをより好んで接触する傾向があるものの、両者の映像メディア接触量全体はこの年代では差はないものといえよう。

表８ Time３（２歳）での外遊び時間とメディア接触量（テレビ・ビデオ・映像接触）の男女差
（平均値の差のt-検定、（ ）内は標準偏差）

	男児（n=535）	女児(n=486)	t 値
テレビ接触量	156.76 (105.79)	171.61 (110.28)	-2.19 **
外遊び時間	103.78 (53.35)	103.61 (63.23)	.05 *n.s.*
ビデオ接触量	45.80 (45.78)	38.77 (43.10)	2.36 *
映像接触量	204.37 (111.00)	212.26 (116.87)	-1.04 *n.s.*

注） 数字は１日あたりの接触量（分）、映像接触量は、テレビ、ビデオ、テレビゲームの接触量を合計したもの。
* : $p < .05$; ** : $p < .01$

③ 母親の子育てストレスとテレビ・ビデオ接触量との関連

母親の子育てストレスの程度とテレビおよびビデオ接触量との関連について、構造方程式モデルを用いた３時点間の交差時差遅れ分析を実施した。指標とした変数は、０歳・１歳・２歳時点母親の抑うつ傾向（CES-D: Center for Epidemiology Scale of Depression、Weissman, et al., 1977, 20項目）と子育ての肯定感（子育てに充実を味わっている、などの３項目）と否定感（時間が足りなくて苦しい、などの３項目）である。

子どものテレビ接触量と母親の子育てストレス関連指標との間には有意な関連性は見られなかったが、ビデオ接触量では Time １（０歳）でのビデオ接触量の多さがTime ２（１歳）での子育

ての肯定感を低める方向のパスが有意となった（p <.05, **図 7**）。

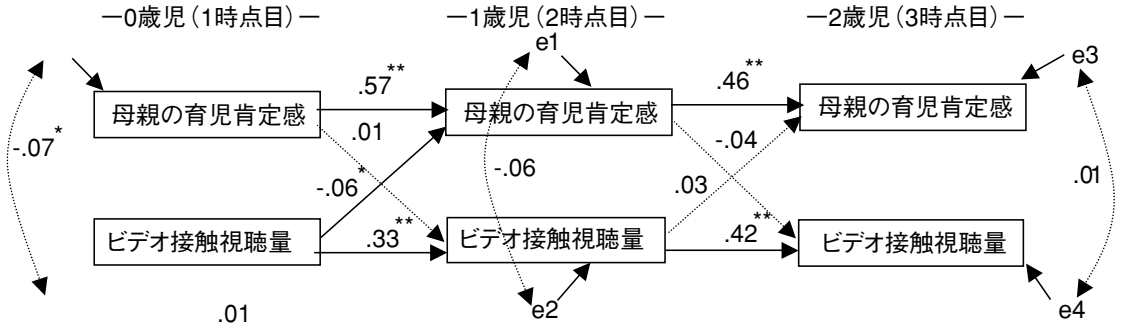


図 7　乳児期における「母親の育児肯定感」と子どものビデオ接触視聴量との関連（交差時差分析）
（実線は 5 %水準で有意な値、点線は有意でなかったパス。値は標準化係数。）
（AGFI=.996, CFI=1.00,RMSEA=.00,AIC=39.09）

(3) 子どもの社会情緒的発達とテレビ・ビデオ接触

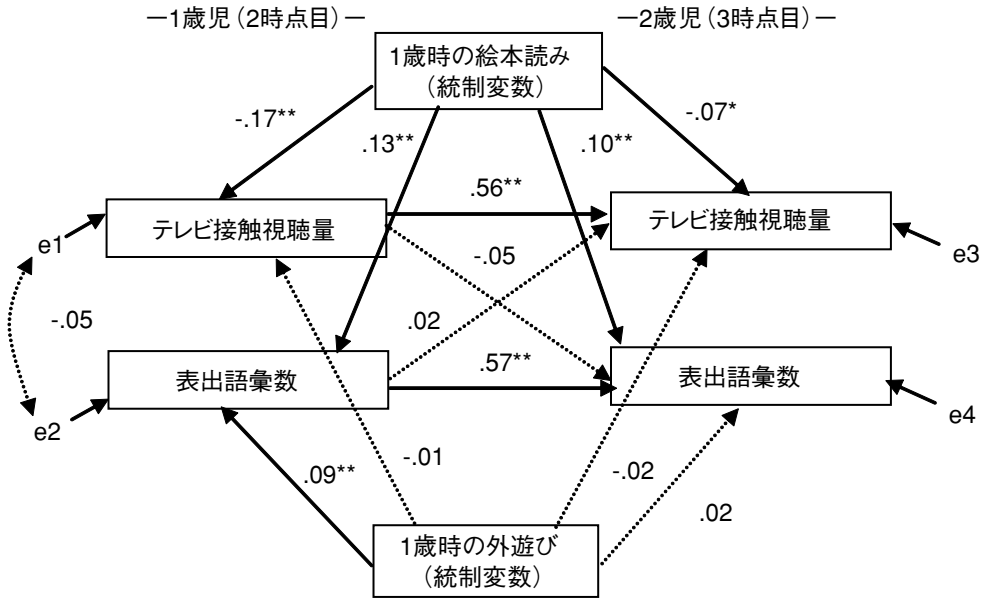
①　子どもの表出語彙数の発達とテレビ視聴量との関連

Time 2（1 歳）とTime 3（2 歳）時にマッカーサー乳幼児言語発達質問紙「語と身振り（8 ～ 18ヶ月用）」および「語と文法」（Fenson et al., 1993; 日本語版：小椋、綿巻, 2003; 2004）を実施した。ここで測定された表出語彙数（1 歳時点の平均値：134.72語（SD=112.36）、2 歳時点の平均値：478.66語（SD=140.40））とテレビ視聴量（子どもが専念して見ていた時間と何かしながらも見ていた時間を合計したもの）との関連について、構造方程式モデルを用いた 2 時点間の交差時差遅れ分析を実施した。第 2 回調査報告書（2003）において、テレビ視聴量と表出語彙数との関連は時間的代替である絵本読みと外遊び時間に媒介される可能性が示唆されたので、統制変数としてTime 2 およびTime 3 の外遊び時間と絵本読みの頻度を投入した。その結果、**図 8** のようにTime 2 のテレビ視聴量はTime 3 の表出語彙数に影響しないことが示された。

Time 3（2 歳）でのテレビ視聴量および絵本読み時間、外遊び時間（いずれも 7 日間の視聴日誌で測定）と同時期の表出語彙数との関連について、年齢、性別を統制した階層重回帰分析をおこなった（**表 9**）。交互作用を見るために、テレビ視聴量、絵本読み時間、外遊び時間の 3 変数について得点のセンタリングをおこない、一次の相互作用項と二次の相互作用項を投入した。第 2 ステップより 2 歳時の表出語彙数に有意な主効果を持つのは絵本読み時間だけであり、第 3 ステップでの交互作用も絵本×テレビ視聴量、絵本×外遊びと絵本読みが関わっている変数で有意な結果となっている。第 4 ステップでは絵本×外遊び×テレビ視聴量の二次の交互作用が有意な値を示した。

②　1 歳から 2 歳への語彙獲得と養育者のテレビ共有行動：共有的フィルタリング機能の検討

メディア接触の子どもの発達に及ぼす影響の媒介過程の一つとして、本プロジェクトでは養育者の共有的フィルタリング機能（共視聴：co-viewingと解説：comment）を想定して測定をおこなった（**図 3**）。養育者に対するアンケート票での測定項目（**表 3**）の他に共視聴については具体的な人は特定できないものの、保護者や他の人と一緒に見る共視聴行動については視聴日誌に



「絵本読み」と「外遊び」間の相関はr=.08*

図８　乳児期における「テレビ接触視聴量」と「表出語彙数」間の因果関係
（実線は５％水準で有意な値、点線は有意でなかったパス。値は標準化係数。）
（AGFI=.965, CFI=.97,RMSEA=.03,AIC=81.91）

おいても記録を求めた。これらの共有行動に関する変数とTime ３（２歳）時点での表出語彙数との相関を求めたところ（**表10**）、“見ているテレビの内容について子どもと話す”という解説機能では両親とも有意な正の相関が見られたが、共有接触量では弱いながらも負の関連が見られた。両者を投入した重回帰分析の結果を**表11**に示す。ここでも見ているテレビの内容を子どもと話すという解説行動が語彙数と正の関連を示したのに対し、共視聴量は負の関連となり、両者の言語発達に及ぼす影響性は異なったものであることが示唆された。

０歳・１歳・２歳での両親それぞれの解説行動（テレビ内容に関する会話）と１歳時および２歳時での表出語彙数との関連について、構造方程式モデルを用いた３時点間の交差時差遅れ分析を実施した（**図９**）。両親ともに０歳時点での解説行動が１歳時点での語彙獲得に促進的に作用することが示されたが、母親についてはその後も１歳時の解説行動が２歳時の語彙獲得を促進し、かつ１歳時の語彙量が２歳時での母親の解説行動を促進するという両因果の関係にあることが示された。テレビを見ている時の養育者による命名行動や発話促進、子どもの発話の修正などが子どもの語彙獲得を促進する役割を果たしている可能性が伺われる結果であり、０歳後半から発達する共同注意行動（joint attention）が言葉の発達や遊びの発達と深く関係する（Tomasello, 1986; Bigelow et al., 2004）ことと関連する事象なのかもしれない。今後さらに項目を精緻化した上での検証が求められよう。

③　問題行動傾向との関連

Time ３（２歳）では、子どもの行動調査票２～３歳児用（親記入版、Achenbach & Edelbrock, 1983）の外在的問題行動（externalizing problems）の攻撃・反抗尺度（aggression）、注意の問

表 9　2 歳時の表出語彙数とテレビ視聴量、外遊び時間、絵本読み時間との関連（階層重回帰分析、N=852）

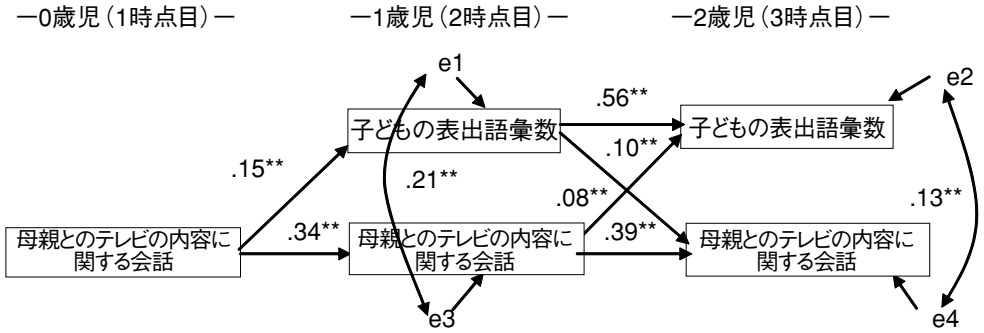
	説明変数	β	R^2変化量	調整済み R^2
第1ステップ	月齢	.22**		
	性別	.19**	.08**	.08**
第2ステップ	月齢	.22**		
	性別	.20**		
	テレビ視聴量	−.03		
	外遊び時間	.00		
	絵本読み時間	.12**	.02**	.10**
第3ステップ	月齢	.22**		
	性別	.20**		
	テレビ視聴量	−.04		
	外遊び時間	.03		
	絵本読み時間	.12**		
	テレビ×外遊び	−.03		
	テレビ×絵本	−.07*		
	絵本×外遊び	−.12**	.02**	.11**
第4ステップ	月齢	.22**		
	性別	.20**		
	テレビ視聴量	−.03		
	外遊び時間	.03		
	絵本読み時間	.12**		
	テレビ×外遊び	−.00		
	テレビ×絵本	−.05		
	絵本×外遊び	−.14**		
	テレビ×絵本×外遊び	−.10**	.01**	.12**

** p < .01

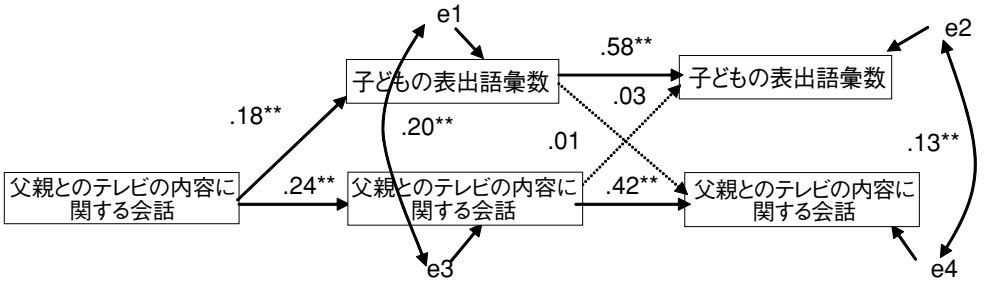
表10　Time 3（2 歳時）における養育者のテレビに関する共有的フィルタリング機能と表出語彙数との関連（相関係数、N-793）

	表出語彙数
＊　父親の解説行動（comment） ：“見ているテレビの内容について子どもと話す”	.17**
＊　母親の解説行動（comment） ：“見ているテレビの内容について子どもと話す”	.24**
＊　父親の共視聴　（co-viewing） ：“子どもといっしょによくテレビを見る”	-.01
＊　母親の共視聴　（co-viewing） ：“子どもといっしょによくテレビを見る”	-.02
＊　視聴日誌での“共有接触量”	-.09*

* : p < .05; ** : p < .01



X2(2, N=902)=12.413, p=.002, GFI=.995, AGFI=.959, CFI=.986, RMSEA=.076, AIC=38.413



X2(2, N=793)=5.470, p=.065, GFI=.997, AGFI=.979, CFI=.994, RMSEA=.047, AIC=31.470

図９　乳児期における「子どもの表出語彙数」と親との「テレビの内容に関する会話」との因果関係
：上段が母親、下段が父親（実線は５％水準で有意な値、点線は有意でなかったパス。値は標準化係数。）

表11　２歳時の表出語彙数と養育者のテレビの共有行動との関連：解説と共視聴

	β	調整済みR^2
年齢	.21 **	
性別	.20 **	
父親の解説(TV中の会話)	.13 **	
母親の解説(TV中の会話)	.17 **	
テレビ共有接触量	-.09 **	.15 **

** : $p < .01$

題尺度（attention problems）の２つの下位尺度および内在的問題行動（internalizing problems）の社会的引きこもり尺度（social withdraw）の計３つの下位尺度を用いて子どもの問題行動傾向の測定をおこなった。**表12**に３尺度の主成分分析の結果を示す。

これらとテレビ・ビデオ接触量との関連を年齢と性別を統制した上で検討したところ、攻撃・反抗尺度と引きこもり尺度はごく弱いながらも正の有意な関連が示された（**表13**）。これらの変数間の因果関係については、今後の調査において同一尺度での測定を実施し確認する必要があろう。

問題行動傾向と有意な相関が見られた緒変数との関連を検討するために、注意の問題、攻撃・反抗、引きこもりの３下位尺度得点をそれぞれ最終従属変数とする階層重回帰分析をおこなった。投入変数は、ステップ１に子どもの属性（月齢、性別、Time 1 に測定した気質特徴：新奇追求性、報酬依存性、損害回避性、持続性）、ステップ２に両親変数（学歴、養育態度の温かさ、抑

表12　2歳時Child Behavior Checklistの下位尺度項目（主成分分析）

ADHD	因子負荷量
じっと座っていられず、落ち着きがない	.80
やっていることが次々と変わる	.77
集中力がなく、一つのことに注意が持続しない	.76
動き回ったり、物をやたらと触りまくる	.70
寄与率（%）	57.47
信頼性係数	α=.75

攻撃・反抗性	因子負荷量
怒りっぽい	.75
要求がすぐにかなわないと我慢できない	.71
短気、かんしゃくを起こしやすい	.69
頑固、不機嫌、イライラしやすい	.68
言いつけに従わない	.65
わがままで何でも独り占めしようとする	.65
反抗的である	.64
他の人をたたく	.61
叱っても効果がない	.61
よく大声で叫ぶ	.60
とても騒がしい	.59
人に乱暴する	.58
欲求不満になりやすい	.57
悪いことをしても罪の意識がないようだ	.54
よく喧嘩をする	.53
突然気分や感情が変わる	.49
寄与率（%）	38.73
信頼性係数	α=.89

引きこもり傾向	因子負荷量
動作が緩慢で元気がなく活動性に欠ける	.59
周りの物事にあまり興味を示さない	.59
他の子とうまくいかない	.55
体を動かす活発な遊びを嫌がる	.49
引きこもって、人と交わらない	.47
話しかけられても返事をしない	.44
家から出たがらない	.41
協調性がない	.55
嬉しさや楽しさを人にしぐさや表情で示さない	.49
頭を撫でられるなど、人の好意的なしぐさには反応しないように見える	.49
寄与率（%）	26.22
信頼性係数	α=.65

うつ傾向、子どもに対する信頼感)、ステップ3に生活時間変数（テレビ接触量、ビデオ接触量、屋外遊び時間、絵本読み時間）である。注意の問題については、最終の決定係数（調整済みR^2値）が.003と低く、モデル自体が有意なものとはならなかった。注意の問題を説明する緒要因はこれらの変数以外のものであることが推察される。攻撃・反抗傾向の決定係数はR^2=.24（p<.001）で、ステップ1．ステップ2は有意なR^2変化量を示したが、ステップ3は有意な変化量を示さなかった（**表14**）。最終ステップで有意な説明変数として残ったのは、ステップ1の気質変数の新奇追求性（p<.01）、報酬依存性（p<.05）、ステップ2の母親の養育態度の温かさと母親の抑うつ傾向（いずれもp<.01）および両親の子どもに対する信頼感（いずれもp<.05）であり、新奇追求性と報酬依存性が高さと、また両親の子どもに対する信頼感の低さと母親の養育態度の温かさの低さおよび抑うつ傾向の強さと関連することが示された。引きこもり傾向の決定係数はR^2=.09（p<.001）で、ステップ1．ステップ2は有意なR^2変化量を示したが、ステップ3はここでも有意な変化量を示さなかった（**表15**）。最終ステップで有意な説明変数として残ったのは、ステップ1の気質変数の新奇追求性（p<.05）、ステップ2の母親の抑うつ傾向（p<.01）で、新奇追求性の高さと、また母親の抑うつ傾向の強さが関連することが示された。したがって、**表13**で見られた問題行動とメディア接触量との関連は関連緒変数を統制した後では消失し、今回検討をおこなった3種類の問題行動に対するメディア接触の影響力は2歳時点では大きなものと考える必要はないものと思われる。しかし、今回の研究では簡単な行動チェックリストでの問題行動の測定を実施したにすぎず、今後より確度の高い測定によって検証することが求められよう。

問題行動の縦断的変化に及ぼすメディア接触量の影響を検討するために、Time 3で実施したCBCL2-3の3つの下位尺度のうち、反抗・攻撃的な尺度と対応しているTime 2（1歳）の外在化型の問題行動尺度の得点を用いて、2時点間の交差時差遅れ分析をおこなった。テレビ接触量とは有意な関連性が見出されなかったが（**図10**）、ビデオ接触量については、1歳時点で問題傾向の高いほど2歳時点でのビデオ接触量が多くなることが示された（**図11**）。どのようなメカニズムでこうした促進効果が生じるのか、今後詳細な検討が必要であろう。

表13　Time 3（2歳）での問題行動傾向（CBCL2-3）とテレビ・ビデオ接触量との関連

	Time 3 テレビ接触量	Time 3 ビデオ接触量
注意の問題傾向	.06	.04
攻撃・反抗傾向	.10**	.05
引きこもり傾向	.10**	.10**

(**: p < .01 年齢・性別を統制後のβ値)

表14　2歳時の反抗・攻撃傾向の関連要因

	説明変数	β	R^2変化量	調整済みR^2
第1ステップ	年齢	-.06		
	性別	-.03		
	気質新奇性追求	.30 **		
	気質報酬依存	.03		
	気質損害回避	-.04		
	気質持続	-.02	.09 **	.09 **
第2ステップ	年齢	-.04		
	性別	-.04		
	気質新奇性追求	.20 **		
	気質報酬依存	.08 *		
	気質損害回避	-.03		
	気質持続	-.02		
	母親の学歴	-.04		
	父親の学歴	-.03		
	父親の温かい養育態度	.04		
	父親の抑うつ	-.02		
	父親の信頼感	-.08 *		
	母親の温かい養育態度	-.17 **		
	母親の抑うつ	.25 **		
	母親の子どもに対する信頼感	-.09 *	.16 **	.24 **
第3ステップ	年齢	-.04		
	性別	-.04		
	気質新奇性追求	.20 **		
	気質報酬依存	.08 *		
	気質損害回避	-.03		
	気質持続	-.02		
	母親の学歴	-.02		
	父親の学歴	-.02		
	父親の温かい養育態度	.05		
	父親の抑うつ	-.02		
	父親の信頼感	-.08 *		
	母親の温かい養育態度	-.17 **		
	母親の抑うつ	.25 **		
	母親の子どもに対する信頼感	-.10 *		
	テレビ接触量	.07		
	ビデオ接触量	.03		
	屋外あそび	.02		
	絵本(本)読み	-.03	.01	.24 **

a. 従属変数: 反抗・攻撃傾向　　** $p<.01$; * $p<.05$

表15　2歳児の引きこもり傾向の関連要因

	説明変数	β	R^2変化量	調整済みR^2
第1ステップ	年齢	-.04		
	性別	-.06		
	気質新奇性追求	.14 **		
	気質報酬依存	-.03		
	気質損害回避	.01		
	気質持続	-.07	.04 **	.03 **
第2ステップ	年齢	-.03		
	性別	-.07		
	気質新奇性追求	.09 *		
	気質報酬依存	.00		
	気質損害回避	.01		
	気質持続	-.07		
	母学歴	.01		
	父学歴	.02		
	父親の温かい養育態度	.08		
	父親の抑うつ	.02		
	父親の信頼感	-.05		
	母親の温かい養育態度	-.09		
	母親の抑うつ	.18 **		
	母親の子どもに対する信頼感	-.07	.07 **	.09 **
第3ステップ	年齢	-.03		
	性別	-.07		
	気質新奇性追求	.09 *		
	気質報酬依存	.00		
	気質損害回避	.01		
	気質持続	-.07		
	母親の学歴	.02		
	父親の学歴	.03		
	父親の温かい養育態度	.09		
	父親の抑うつ	.03		
	父親の信頼感	-.05		
	母親の温かい養育態度	-.08		
	母親の抑うつ	.18 **		
	母親の子どもに対する信頼感	-.07		
	テレビ接触量	.06		
	ビデオ接触量	.06		
	屋外あそび	-.02		
	絵本(本)読み	.00	.01	.09 **

a. 従属変数: 引きこもり傾向　　** $p<.01$; * $p<.05$

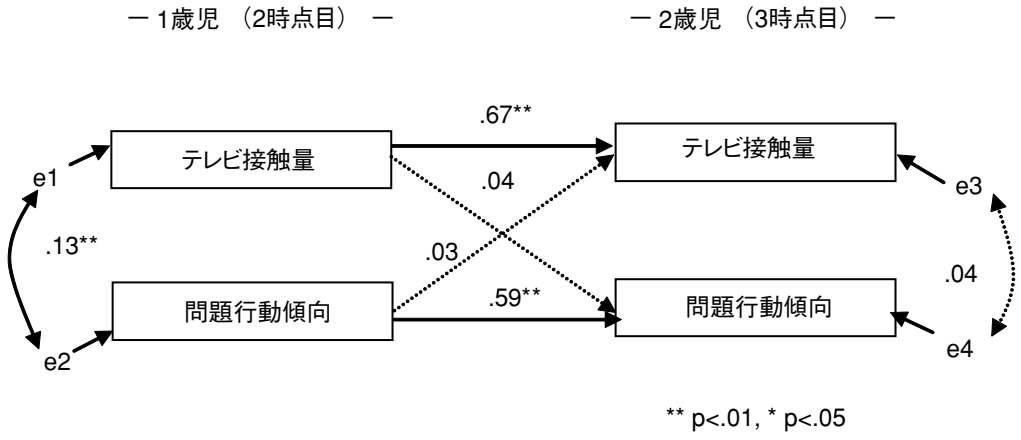


図10　乳児期における「テレビ接触量」と「統制不全型の問題行動傾向」間の因果関係
（実線は５％水準で有意な値、点線は有意でなかったパス。値は標準化係数。）

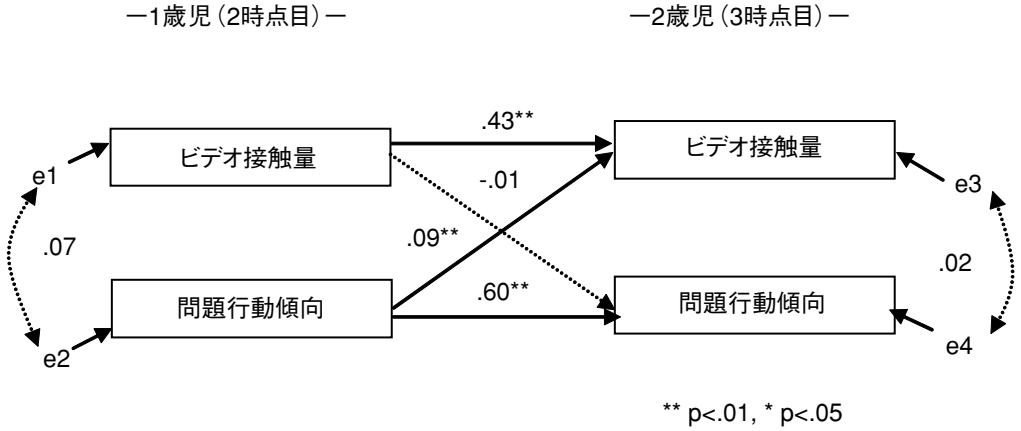


図11　乳児期における「ビデオ接触量」と「統制不全型の問題行動傾向」間の因果関係
（実線は５％水準で有意な値、点線は有意でなかったパス。値は標準化係数。）

X^2	DF, N	p	GFI	AGFI	CFI	RMSEA	AIC
子どものテレビ視聴と問題行動	.000	0, 845		1.000		1.000	20.000
子どものビデオ視聴と問題行動	.000	0, 845		1.000		1.000	20.000

引用文献

Achenbach, T.M., Edelbrock, C. S. 1983 *Manual for Child Behavior Checklist and revised Child Behavior Profile*. Queen City Printers, Burlington, CT.

Bigelow, A.E., MacLean K, & Proctor, J. 2004 The role of joint attention in the development of infants' play with objects. *Developmental Science*, 7, 518-526.

Cloninger, B. Preschool Temperament and Character Inventory （P-TCI）. 2000 私信による.

Fenson, L., Dale, P.S., Reznick, J.S. et al. *1993 MacArthur Communicative Development Inventories: User's Guide and Technial Mnual*. San Diego: Singular Publishing Group, Inc.

NHK放送文化研究所 2003 *幼児生活時間調査*・2003 NHK放送文化研究所.

NICHD Early Child Care Research Network. 2005 *Child Care and Child Development: Results from the NICHD Study of Early Child Care and Youth Development*. New York.:Guilford Press

小椋たみ子・綿巻 徹 2004 マッカーサー*乳幼児言語発達質問紙「語と身振り」手引*. 京都国際社会福祉センター.

菅原ますみ，北村俊則，戸田まり他：子どもの問題行動の発達：Externalizing な問題傾向に関する生後11年間の縦断研究から. *発達心理学研究*, 10, 32-45, 1999.

Tomasello, M., & Farrar, M.L. 1986 Joint attention and early language. *Child Development*, 57, 1454-1463.

Weissman, M.M., Scholomskas, D., Pottenger, M. et al. 1977 Assessing depressive symptoms in five psychiatric populations: a validation study. *American Journal of Epidemiology*, 106（3）, 203-14.

綿巻 徹・小椋たみ子 2004 マッカーサー*乳幼児言語発達質問紙「語と文法」手引*. 京都国際社会福祉センター.